

国民国家と人種主義

中島, 成久

(出版者 / Publisher)

法政大学国際文化学部

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

異文化 / 異文化

(巻 / Volume)

2

(開始ページ / Start Page)

190

(終了ページ / End Page)

214

(発行年 / Year)

2001-04-01

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00004524>

国民国家と人種主義

Nation-State and Racism

中島 成久

1. 人種と歴史—啓蒙主義を超えて

レヴィ＝ストロースは1952年ユネスコの依頼を受けて「人種」について文章を書き、それは1953年『人種と歴史』という本にまとめられた。レヴィ＝ストロースは1955年『悲しき熱帯』で世界的な話題をさらい、思想家として一気に注目された。だが、ルソーの流れを強く引く啓蒙主義者としてのレヴィ＝ストロースの思想的な骨子は、その3年前に書かれたこの『人種と歴史』の中で強調されているという点で本書は注目される。

レヴィ＝ストロースは、第1章「人種と文化」の中で、ゴビノー以来の人種論を論駁するだけでなく、人種と文化全体の問題との関連性を強調する。つまり、人類文化の多様性は、人種概念に帰せられるのではなく、人類文化が地理的、歴史的、社会的な環境によって異なっているからだと主張している。

レヴィ＝ストロースは言う。

人類学の原罪は、人種の純粹に生物学的な概念と、人類諸文化の社会学的、心理学的な産物とを混同するところにある。ゴビノーはこの混同を犯すだけでたちまち、差別と搾取のあらゆる試みの正当化につなげた。

諸人種の文明に対する寄与を語る場合、アジアやヨーロッパ、アフリカやアメリカの文化的寄与が、これらの大陸の主な人種系統の住民が居住しているという事実によって何らかの独自性を生じているというのではない。それがあったとしても、それは地理的、歴史的、社会学的環境から来ているのであって、黒人や白人の解剖学的、生理学的体質に関わる異なった素質に由来するのではない。

ようとする言語による意思の自由な疎通にいたることが難しいという現実の問題は、それに対して様々な理由が指摘されてきた。日本語は、現在流布する言語としては、他言語から孤立する言語であり、したがって、ゲルマン系言語が、相互の類縁性を認識に入れることでその習得が容易になりえることがあるのに比して、日本語に関しては、そのようなことが期待できない。また、よく言われるところの、いわゆる、日本人の明確な断言を避ける、すなわち、あまりに明確な意思言明を避けるメンタリティーなるものも理由とされたりもする。あるいは、日本の学校教育が、そもそも読み書きそろばんの発想に閉じ込められたままであって、与えられた課題を受動的に処理することだけを教えているという指摘もある。

しかし、本論において論じたのは、発話行為が成立するその原理にたちかえて考えてみると、日本語と他の言語とは、その原理そのものは、言語として当然ながら、全く同じものであるのだが、日本語には、その原理の作動において、固有の特質があるということである。それが、発話行為における、言語記号の非在から現前化をへてまた非在にいたるという原理であり、そして、その現前化が、日本語においては、停滞することで現前化が可能になるという特質である。

であるから、日本におけるコミュニケーション重視型教育の困難さは、日本人のメンタリティーなるものをあげつらうことから、あるいはまた、教育の基本方針を時代に即して修正していくことから、克服の端緒が得られていくものでは、本来ないのである。すなわち、日本語を習得する中で、言語運用そのものをそういうものとして身に付けている者は、その日本語の発話行為の特質を知らない限りは、自らの発話行為を反省できるはずがないのである。

注

- (1) ジャック・デリダ：ポジション。高橋允昭訳。第3版。1985年。15ページ。
- (2) ロラン・バルト：表徴の帝国。宗左近訳。新潮社。1974年。

ちくま学芸文庫、1996年、156ページ。

人類の生活は画一的な単元的体制下で発展するのではなく、さまざまな社会や文明の驚くほど多様な様態を通じて発展する。諸社会、諸文明間の知的、美学的、社会学的な差異は、生物学的次元でもろもろの人間集団に見られる諸様相間との差異と、いかなる因果関係によっても結ばれてはいない。人種よりも多くの人類文化がある。人種はただいくつと数えられるのに、人類文化は幾千にも達する。つまり同一人種によって築かれた二つ以上の文化がある。実際に公衆の心の中で密接に人種の不平等の問題と結びついている人類文化の不平等—ないしは差異—の問題を取り上げなければ、人種の不平等を否定的に解決したとはいえない¹。

人類の身体的特徴の多様性は無限にある。そうした身体的特徴をいくつかの類型で表わそうとするのが「人種」概念のめざすものであったはずだが、人類の身体特徴は「人種」の気質的特徴、文化・文明的発展段階を説明する手段に容易に転じてしまった、とレヴィ＝ストロースは非難するのである。つまり「人種」概念は「人種主義」に他ならないというわけである。

レヴィ＝ストロースの人種論の特徴はさらに、1960年代初頭に『野生の思考』で展開された「熱い社会」「冷たい社会」論のさきがけが見出される点で注目される。第6章「停滞的歴史と累積的歴史」のなかでレヴィ＝ストロースは、《動く歴史》と《動かない歴史》という区別を導入している。つまり、「西欧文明はこの2、3世紀来、ますます機械的手段を人間の思いのままに駆使する方向に向かった。この基準をとれば、住民一人当たり利用可能なエネルギー量が人間社会の発展の表現となる。西洋文明は北アメリカにその最高度の位置が来て、すぐ次ぎにヨーロッパ、そして急速に区別がつかなくなってアジア、アフリカの諸社会をその下において行く。だが、基準が、最も敵対的な地理的環境に打ち克つ能力の度合いであったならば、一方でエスキモー人〔原文のまま〕が、他方でベドウィン人が勝利の栄冠をつかむであろう。インド人は他のいかなる文明にもまして、優れた哲学的＝宗教的体系を築き得たし、身体とモラルの間の関係の領域においても、オリエントと極東は西洋に対して数千年の進歩がある」²と言っている。

西欧文明に高い評価が与えられるのは、機械力の行使とか、一人あたり使用エネルギー量の観点から見た場合であって、別の尺度をとれば、他の文明が上位にくるのは当然である。またレヴィ＝ストロースの時代には明確には意識されなかった地球環境問題という観点から見れば、西欧文明は人類に最も敵対的な文明という最悪の評価になってしまうだろう。

レヴィ＝ストロースの問題意識は、進歩という観念にも向けられていた。原始／未開から文明へという単線的な進化という考えを否定して、ある時代に進歩した文明／文化も、次の時代には時代遅れとみなされることがよくある。これまた『野生の思考』で展開されたレヴィ＝ストロースの文明論である。『人種と歴史』の第3章「偶然と文明」の中で、「われわれがある進歩の型に関心を惹かれる時、われわれは最も高度にそれを実現している諸文化に価値をとっておくだろう。そして他の諸文化の前では無関心なままでいる。こうしておのおのの好みによってあらかじめ決定されている方向への最大の進歩だけが進歩では決していない」³とレヴィ＝ストロースは述べている。こうした主張は、野蛮人の中にこそ文明に毒されてない理想の生活があるとして文明批判を行ったルソーの理想（「高貴な野蛮人」説）を受け継ぐものである⁴。

しかしながらレヴィ＝ストロースの人種論は、こうした指摘の重要性にもかかわらず、ルソー以来の啓蒙主義の根底的な批判をそのうちに見出すことができなかった。フランス革命を経て形成された啓蒙主義、国民国家は「自由、平等、友愛」という理想を掲げて近代を貫く根本原理になった。だが、そうした理想の下に、近代国家は暴力装置を発展させ、植民地の帝国主義的争奪とその経営、国民国家内部の少数者への弾圧を強めてきた。さらに最近ではジェンダーの視点から、近代の理想の中には男女の実質的な不平等が当然のように前提にされていると批判されてきた。

「多文化主義」の理論的な問題を検討しているチャールズ・テーラーは、「平等な尊敬をめぐる政治的言説はルソーに発するが、彼の解決策には決定的な欠陥を持っていたと論じられる」と述べている。ルソーのいう社会契約説では、「人民は主権を持つと同時に服従しなければならない」。なぜなら、「ルソーにおいては自由（従属の不在）、差異化された役割の不在、きわめて緊密な共通の目的の3つのものが不可分である。二者間の依存が存在しないようにわれわれはみな一般意思に依存しなければならない。これはジャコバン派から始まって20世紀の全体主義的体制に至るまで、均質化を強いる暴政の中でも最もおぞましい政治体制の政治信条となってきた」⁵。

こうした啓蒙主義、近代の理想の根本的な批判には、ナショナリズム、ジェンダー、あるいはエスニシティ、さらには世界システム論といった国民国家の本質が正面から議論される1980年代以降の学問的な発展を待たねばならなかった。

ウォーラーステインは『人種・国民・階級—揺らぐアイデンティティ』の中で人種主義を内包する近代システムについて、大略次のように述べている⁶。

(1) 近代世界は地方的忠誠の範囲を超えて普遍主義的用語を発達させたが、「人類は同胞」という用語そのものが、自己矛盾である。近代以前のシステム⁷では内部の者と外部の者との道徳的・政治的区別をつけることをいとわなかった。だが、近代の啓蒙思想は一神教的論理を更に推し進め、人間性そのものから道徳的平等性と人権を引き出した。

(2) 資本主義的社会関係とは貨幣という単一の尺度によって表示される同質的な商品形態に万物を還元する。それによって、財貨の生産効率を最大にするよう、また能力主義への信奉が帰結される。能力主義は相続によって獲得された特権よりも政治的道徳的に許容しやすいと考えられるが、実際には政治的にはもっとも不安定なものである。人種主義と性差別主義が登場するのは、この政治的脆弱性を補うためである。

(3) 人種主義は労働力の「エスニック化」と呼びうる形態を取ってきた。人種主義は、人種・民族・国民・宗教集団の実態の境界を定義する際、(遺伝的／社会的) 過去との連続性に基礎を置く要求と、現在志向的な伸縮性をつなげてきた。この伸縮性は、人種的、民族的・国民的・宗教的共同体の創出と、これらの絶えざる再創出という形態を取り、常に階層的に等級付けられている。その結果、教義としては反普遍主義であるからこそ、システムとしての資本主義を維持するのに役立っている。

(4) 普遍主義／能力主義と、人種主義／性差別主義との組み合わせは、効果的に機能する。だが、さまざまな集団が一方では普遍主義を、他方では人種主義／性差別主義を度を越えて推進するから資本主義経済は常に両者の矛盾に危機を迎える。

ウォーラステインが上の(2)で能力主義が「政治的にはもっとも不安定なもの」と述べているのは肯定しがたいが、「人種主義の登場がその政治的脆弱性を補うため」と述べているのは、人種主義の起源についての新たな視点を示唆する。ウォーラステインの主張のポイントは、資本主義とそれが前提とする国民国家は、一方では普遍主義の原理に基づくが、他方ではその補完として、人種主義、性差別主義といった反普遍主義を生み出していくということである。レヴィ＝ストロースの啓蒙主義的人種主義を超える視点が、こうしたウォーラステインの主張に明確に認められる。

ベネディクト・アンダーソンの『想像の共同体』では、人種主義と愛国心の問題がナショナリズムの問題と不可分の関係であることが強調されている。アンダーソンは『想像の共同体』の第8章「愛国心と人種主義」に関する議論の中で、ナショナリズム、国民であることの意識と人種主義がきわめて似た感情であることを詳細に検討している。この問題はアンダーソンのナショナリズム論においてこれまであまり強調されてこなかった問題であるが、ア

アメリカの女性人類学者アン・ローラ・ストーラーの一連の研究でその重要性が強調され、新たな展開を遂げている。

ストーラーは、まず、北スマトラにおけるプランテーション・ベルトの社会史研究において、資本、階級、人種、民族（エスニシティ）、ジェンダーといった諸問題の対立・葛藤関係を詳細に研究した。そして、プランテーションにおける資本、階級といった経済関係の問題は、人種、民族（エスニシティ）、ジェンダーといった問題抜きには考察されないことを論証した。つまり、資本、階級関係と人種、民族（エスニシティ）、ジェンダーとの関連性をこれまでにない説得性をもって論証したのであった。

さらにアン・ストーラーは、一般的に植民地人種主義の成立の問題をミッシェル・フーコーの『言葉と物』における議論と対比させている。つまり、植民地における人種主義の成立は、近代ヨーロッパ社会における「人間」観の成立と不可分の関係にあるというのである。逆に言うと、植民地人種主義の成立によって、ヨーロッパ社会における「人間」観の成立が加速されたというのである。

アン・ストーラーとは異なる視点からレヴィ＝ストロースの構造主義を歴史の問題として正面から考察しようとしているバリバルは、ウォーラステインと共同して、人種、階級、エスニシティの問題を考察している。彼らの議論はストーラーの議論と重なるところが多く、その共通の問題点を詳細に検討することが必要である。国民国家というものは、人種主義を内在し、それを拡大再生産するものである。これは国民国家という国家形態の歴史的な宿命である。こうした事実を直視することこそが、人種主義、ジェンダー、エスニシティといった国民国家に固有の問題を根本的に解決する糸口を提供するだろう。

2. ナショナリズムと人種主義

アンダーソンのナショナリズム論の根底に「死」をめぐる議論がある。アンダーソンはその著書のいたるところで、「人々はなぜ想像の産物である国民というもののために死ぬことができるのか」⁸と問うている。20世紀は戦争の世紀であったが、戦争の犠牲者を国のために殉じた殉教者としてたたえ、その愛国的な行為を賛美し、その行為の純粋性が強調されるほど、その悲劇性は軽減される。ここに愛国心とナショナリズムは結合する⁹。

アンダーソンは、植民地支配者の人種主義的愛国心と、被支配者のゲマインシャフト的表象に満ち溢れたナショナリズムの違いに注目している。帝国主義的支配や戦争を賛美する数

多くの文学、音楽、芸術作品のなかに人種主義的感情が満ちているのは当然である。だが、植民地支配から立ち上がろうとする植民地ナショナリズムの側には、支配者への憎しみが驚くほどないとアンダーソンは断言する。国民への愛は膚の色とか、血統などと同化される。つまりゲマインシャフトを想起する用語が多用される。

処刑前のホセ・リサールの詩にあるように、政治的な愛の表現は親族関係の用語（母国、父の国、patria）や故郷に関する用語（故郷、タナー・アイール¹⁰）などで表現される。かくして国民であることは膚の色とか、ジェンダー（性別）、血統などと同化させられる。いずれも個人が選べない物である。つまり、ゲマインシャフトを想起させる用語と結びつく¹¹。

ところが、植民地支配者の側からはすさまじいほどの人種主義的表現が発せられている。そうした人種主義的表現は植民地支配者の側から被支配者に向けられた軽蔑と憎悪、優越の表現であるのみならず、植民地争奪戦争を繰り返した帝国主義者の間でも同様にお互いの敵を憎悪する表現のうちに見出された。

フランスやアメリカの植民地主義者は、多くのベトナム人を何年もの間殺しつづけたが、ベトナム語の「不可解さ」への憤激が噴出し、死につつある植民地主義に関する隠語—「ゲークス」（東洋人め！）—が多用された。

そうした悪口雑言は基本的に人種主義的である。「スラント」という言葉は「目の細い（スラント・アイド）」の縮小された言葉であるが、単に政治的敵をさすだけではない。その言葉は肉体的な外観に敵を帰すことでその国家性を消し去る。それは肉体的な特徴に言及することでベトナム人を否定する。ちょうどratonがアルジェリア人であることを消し去るように。こうした言葉の特徴はベトナム戦争期の「チャーリー（ベトコン）」とか「VC（ベトコン）」のような他の言葉と対比される。それはより以前のボシェズBoches「（ドイツ人の）木偶の坊」、フンズHuns「第二次世界大戦中のドイツ兵」、「ジャップス」、フロッグズ（フランス人）¹²といった言葉と同じく、ある一つの国民に対して用いられる侮蔑語であるが、敵の成員への蔑称である¹³。

ここでのアンダーソンの議論は、太平洋戦争当時の日米間の人種主義的差別と偏見の問題

を分析したジョン・ダワーの議論と通じ合う¹⁴。商業主義的配慮から『人種偏見』と邦訳書の題名がつけられたこの本の原題を直訳すると『無慈悲な戦争—太平洋戦争における人種と力関係』となる。この原題からも推察されるように、ダワーのこの本は「人種戦争の真相を明らかにし、太平洋戦争における日米両国の憎悪の構造を分析し、人種主義再生の危険性に警鐘を鳴らす問題作」（同書コピーより）であるのだ。欧米人が日本人（軍）を、「猿、劣等人種、狂人」として表現するのに対して、神州不滅を唱える日本人（軍）は欧米人（軍）を「鬼、エゴイスト、道義なき人々」と見る傾向が強かった。だが、アンダーソンとダワーは次の点で決定的に異なる。つまり、ダワーが日米間の人種的偏見、差別の問題を分析したのにとどまったのに対して、アンダーソンはナショナリズム全体の問題との関連性を追及する。

ここでアンダーソンは、オフィシャル・ナショナリズム¹⁵とそれに由来する人種主義を、植民地支配者側の人種主義に対して、相互に関連はするが別々の現象として捉えようとする。オフィシャル・ナショナリズムの成立の背景にはポピュラー・ナショナリズムの流行がある。そのポピュラーナショナリズムと関連して20世紀に植民地解放運動という形をとって植民地ナショナリズムが登場する。だがそうした歴史的素描の影で、オフィシャル・ナショナリズムは人種主義をその不可欠なパートナーとしながら、帝国の栄光と植民地支配の正当性の根拠として成立したのであった。

人種主義が19世紀にヨーロッパの外で発達したとき、二つの相互に関連する理由からそれは常にヨーロッパの支配と結びついていた。第一で最も重要なことはオフィシャル・ナショナリズムと植民地への支配者の言語の押し付けである。オフィシャル・ナショナリズムは存立を脅かされている王朝と貴族層—上流階級—の大衆的で一般庶民のナショナリズムに対する典型的な反応である。植民地人種主義は王朝の正統性と国民的な共同体を接合させる「帝国」という観念の点ではもっとも主要な要素である。それによって英国領主は他の英国人よりも優れていると思ひ込む。後期植民地帝国の存在はその地の貴族層の保塁を支えるのに役立った。というのは植民地貴族層の保塁はグローバルでモダンな舞台に古い権力と特権を保持しようと現われてきたからである¹⁶。

植民地本国軍と植民地政府軍の間には、目に見える大きな差異が存在した。それこそ植民地軍側の人種主義意識を明瞭に反映したものであった。植民地本国軍が国家を守る職業軍人の集団であったのに対して、植民地軍は一部の将校を除けば少数民族出身の傭兵が中心で、

彼らは正規戦専用というよりはゲリラ戦対策あるいは暗殺要員といった目的に特化していた。

このような植民地軍人間の傾向は、さらに進んで「植民地人種主義」と表現すべき特有な形態の人種主義を生み出した。第3章で詳述するアン・ローラ・ストーラーに言わせると、こうした意識を基礎にして「白人」という人種意識が生まれた。そしてそれは近代ヨーロッパに固有な「人間」観と共振して、「人種主義」を基礎付けた。アンダーソンの議論はそこまで徹底していないのであるが、こうした問題を発見した貢献は高く評価される。植民地ナショナリズムは植民地解放、帝国主義打倒を叫びをするけれども、決して人種主義批判をすることがなかったというのは「驚くべきことだ」、とアンダーソンは言う。これは彼らの寛容性の表れでは決してなく、植民地ナショナリズムの限界を露呈している。植民地ナショナリズム成立の際にも、共通の過去、同胞といった意識が「想像」され、心地よい永遠の時間のサイクルが回っていく。

植民地的イデオロギーの表明以外は、反植民地運動の中には「反人種主義」はほとんど表明されていないことは驚くべきことだ。このことは言語の中にも見出される。例えばジャワ語のlondo（HollanderとかNederlanderから派生）はオランダ人のみならず、「白人」をも意味する。ジャワの農民にとってオランダ人以外の「白人」に出会う機会 はめったにないわけで、その二つの意味は重なっている。同じようにフランスの植民地領で「白人（レ・ブラン）」はフランス人と白人性を分離できず、支配者を意味している。どの場合にも、「ロンド」や「ブラン」が育ちに関する侮蔑語的意味を失うことはなかった。

スペイン語を話す混血メキシコ人は征服者よりも半ば減んでしまったアズテカやマヤなどにその祖先を求める。ウルグアイの革命的な愛国者はクレオールであるが、彼らは1781年凄惨な拷問を受けて死んだ原住民反乱指導者のチュパック・アマルの名前を採っている。

こうしたすべての愛着の対象が「想像されたもの」であることは逆説的である。タガログ人、滅ぼされた部族、母なるロシア、タナー・アイール。「愛国心」はこうした感情と変わるものではない。愛国心のなかには常に好感への想像がある。例えば平凡な男女であっても恋人の目は特別だ。どんな言語であろうと、愛国者にとって彼／彼女の母語は特別だ。その言葉を通して母の膝に出会い、一人で墓に入っていく。過去はよみがえり、仲間意識は想像され、将来が夢想される¹⁷。

バリバールはウォーラーステインとの共同研究の産物である『人種・国民・階級』の第3章「人種主義と国民主義」において、人種主義とナショナリズムの関係について次のように述べている¹⁸。

(1) 人種主義は社会や民族についての不可視の原因を可視的にする哲学である。一方では劣位にある人種が表象しているとされる汚れや危険を社会全体から一掃することを志向し、他方では社会を階層化し、分断する。

(2) ナショナリズムと人種主義とは相補的で、ナショナリズムの発展と国家による公的な利用が、敵対関係や迫害を近代的な意味での人種主義に変容させる。

(3) ナショナリズムの理論と戦略が普遍性と特殊性の矛盾に陥るのは、ナショナリズムが国民の一体性という物神を醸成するから。ナショナリズムは人種主義を通して観念的矛盾へ転化する。

(4) 分類は現実の状況では「中立的」ではありえず、差異化の基準に含まれる社会的・政治的価値は実践の中で争われ、エスニシティや文化を援用しつつ、遠回しで強制される。

つまり、人種主義はナショナリズムの補完物であり、ナショナリズムが国民の統一性を志向するのに対して、人種主義はその普遍主義的理念が不可能であることを表現する。人種主義、エスニシティといった問題は社会の分類にかかわる問題であるが、分類は階層の問題に大きくかわり、社会を差異化していく現象である、といえる。

レヴィ＝ストロースの構造主義を社会変化、歴史の動態に適用しようとする意図の認められるバリバールは、同書の第5章「国民形態—歴史とイデオロギー—」で、アンダーソンが「出版資本主義」の成立によって「国民」という存在が想像されていく、というように国民形成の過程の共通性の方に注目するのに対して、具体的な階級闘争の過程の個別性の方により重点をおく。それでもアンダーソン的な問題関心はバリバールの中に残る。EU（ヨーロッパ連合）の拡大が国家を超越する存在へと転化していくかどうかの問題では、①「ヨーロッパの構築」がヨーロッパ共通言語主義の創設になるのか（どの言語が選ばれるのか）、②「南の住民」（トルコ人、アラブ人、黒人）と対照的に構成された「ヨーロッパの人口学的同一性」を理想化とする方向に傾斜するかどうか懸念される、としてかなり否定的な見解を示している点が注目される¹⁹。

バリバールの議論はアンダーソンが『想像の共同体』の第8章「愛国心と人種主義」の中で曖昧な形で言及した人種主義とナショナリズムの問題を正面から論じている。人種主義という考え方は、国民国家の時代にこそ最も強烈に発揮される。それは国民国家がその内部に

において普遍原理を志向すると同時に、その内部に階級、エスニシティ、ジェンダーといった社会内部の差異を強化していくからである。人種主義とはそうした差異の正当化の「理論」であり、人種主義が暴力と結合する根拠がここにある。アンダーソンは愛国心がその言語的表現として人種主義に転化するといっているが、現実はそうではない。ナショナリズムが前提とする「想像された共同体」として「国民」は、「国民」の普遍性を追及していく際に人種主義を生み出していく。ナショナリズムはそうした矛盾を絶えず内包しながら、存在していく。

3. 人種、階級、エスニシティ

前章の問題は、「自由、平等、友愛」という普遍原理を掲げる国民国家の中の不平等性に注目することが人種主義を考える基本的なスタンスであるということだ。この章では、アンダーソンの問題意識を受け継ぎながら、その限界を突破する可能性を探ってみたい。そのために、アン・ストーラーによるプランテーションの社会史の研究と、バリバール、ウォーラーステインらの理論的な研究を引き続いて検討する。

アン・ローラ・ストーラーは、フランスの経済人類学者モーリス・ゴドリエの下で理論的な研究をなしたあと、1970年代半ばからインドネシアの北スマトラ、デリ地方のフィールドワークに従事した。現在ミシガン大学人類学歴史学部教授で人類学、女性学研究を精力的に行っている。ポリティカル・エコノミーやコロニアル・ディスコースに関する研究で現時点での最高水準を示している、と言えるだろう。

ストーラーは『スマトラ・プランテーションベルトにおける資本と対立、1870—1979』（1985年初版、1995年改訂新版）²⁰の中で、インドネシア・スマトラ島マラッカ海峡沿いのゴム・プランテーション地帯の19世紀後半から20世紀後半の100年間の歴史を綿密にたどりながら、そこに生じた資本、階級、人種、民族、それにジェンダーをめぐるさまざまな矛盾、対立を詳細に分析した。この本はベネディクト・アンダーソンの激賞を受け、水準の高い東南アジア研究に与えられるハリー・ベンダ賞をストーラーは1992年に受賞した。

これに続いてストーラーは1995年『人種と欲望の教育』を書き、ナショナリズム、ジェンダー、ミッシェル・フーコー、ポスト・コロニアリズムなどの問題に関心を持つ者に大きな刺激を与えている。その後ストーラーはポスト・コロニアリズム研究の比較と一般化に向か

い、アフリカ研究のフレデリック・クーパーと共同で1997年に『帝国の緊張：ブルジョワ社会における植民地文化』²¹を編集し、これまた大きな話題を集めていて、その能力の高さを世界に見せつけている。

『スマトラ・プランテーションベルトにおける資本と対立』（以下『資本と対立』）の基本的な問題は、プランテーション経営という資本と階級関係を理解する際、白人とインドネシア人（[原住民]）、白人経営者と中国人クーリーおよびジャワ人移民、さらにそうしたすべてが家族関係を通して表現されるジェンダーやセクシュアリティという問題との位相で考えないとならないということである。つまり、プランテーションを単なる資本と階級関係として捉えてしまうのでは不十分であり、資本を通してみられる白人対現地人という人種関係、現地人間における民族、エスニシティ問題、および生産単位としての家族におけるジェンダーとヘゲモニー関係という枠組みの中でプランテーションを分析したのである。

行政区としての北スマトラは71,000平方キロメートルある。デリ周辺は30,000平方キロメートルあり、そのうち10,000平方キロメートルが外国投資産業の支配下にあった。北にアチュ、西にカロ、タバヌリ高地、東にマラッカ海峡を望むこの地は、火山性の肥沃な土地で、タバコ、ゴム、アブラヤシの栽培に適している。北スマトラ・プランテーションベルトは周辺の住民の労働力がまったく期待できない地域で、中国人、ジャワ人などの移民の労働力が重要な意味を持っていた。特にジャワ人は重要な労働力で、彼らの村落は周囲の農村の貨幣経済化を伴いながら、産業性農園、ジャワ人村落、周囲の現地人村落といった一連のヘゲモニー構造を形成していった。

ストーラーが北スマトラのデリに興味を抱いたのは、デリが過去100年の間に受けてきた殺戮と抵抗の歴史にある。1920年代には白人経営者によって「クーリー殺戮」がなされた。それはデリが東南アジアにおける最大の多国籍アグリビジネスの拠点であったし、今でもそうであるということで、デリは資本の論理に関わる場所だという事実が大きい。その分労働者の抵抗も大きく、労働組合運動も活発で、1950年代にはSARBUPRIという共産党系プランテーション労働者組合が最大の勢力を誇っていた。だから、1965年の反共産党クーデターではデリでも大量の殺戮がなされたが、15年後でもいまだにそのことについて話すことができず、犠牲者の名前は地方の住民台帳に空欄になって残っている²²。

植民地時代には北スマトラのジャワ人労働者は、オランダ領東インドにおける外国通貨と利益の最大の源泉であった。同時にデリは急進主義、反乱の温床であった。日本占領時代と独立運動期において、デリの農園は軍人の供給基地であった。独立運動が終わるとデリの農

園労働者はあらゆる労働者組織の最大の戦闘的な成員となった。1965年のクーデターの後嵐のような外国の投資がデリの農園に注がれた。かくして、デリ農園のジャワ人労働者は人種的、民族的、階級的対立という問題に最も悩まされ、地域的、国家的な権力を求める闘争の中心であった。

北スマトラの農村部には、マレー人、カロ、シマルングン、トバ・バタック、中国人、インド人、それに移民してきた大量のジャワ人が住んでいる。1880年には10万人ぐらいしかいなかったが、50年後の1930年には150万人にも達した。そのうちジャワ人クーリーが半分に達した。1980年には800万人の人口のうち、少なくとも50万人はプランテーション企業に雇われているが、そのほとんどがジャワ人である。

そうした人々の住む家々は、周囲のマレー人とかバタック人の家々とは異なり、まさしく中部ジャワの集落である。ストーラーの研究の焦点は、こうしたプランテーションの周辺にいるジャワ人の経済的・社会的な外観を描くことである。永続的なエステート労働者になることは、特権的なことで、ただ少数の、若くて健康で未婚の男性にかぎられていた。その他大多数は非定期的な形の雇用で、配偶者の福祉のための賃金は少しもなかった。プランテーション周辺部に巢食っている労働者はその生存が経済的な闘いであり、時には政治的な闘いでもあった。企業にとってこうした大量の貧困な労働者階層の存在が常に関心の的であり、その数が増大すると、植民地、地域、国家のエリートが直接企業の労務管理政策に直面するようになった。

ストーラーはさらに、「労働管理と労働者の反乱のあり方」を検討している。この問題は、農民像をどう描くかという問題である。クリフォード・ギアツとセオドア・シュルツの間で展開された「モラル・エコノミー論争」のことは登場してこないが、問題の本質はそれと同じである。つまり、農民というものは資本とか利益というものをまったく理解しないで存在しているのか、あるいは彼らも機会さえあれば利益を追求することを目指すのかという問題である。ストーラーはギアツとシュルツの立場を統合するスタンスを基本的にはとっている。スマトラ・プランテーションベルト労働者を取り巻く経済環境を一方では最も生産性のあがる資本家にとっての適地として描くのみならず、そうであればこそ戦闘的、革命的な労働運動が過激に展開された土地でもあったのは何故かと分析する。

世界のプランテーションシステムにおいて、プランテーション産業は特定の人口をプロレタリアートに転換することによってではなく、労働力の少ない側の自足のある程度認めることによって、その存立条件を再生産してきた。プランテーション経済の専門家は、労働者の

この半プロレタリアート、半農民的配置は、資本の側からするコスト削減手段だとみなしてきた。農民化というものは迎合的な適応というよりは抵抗の一表現であるといえる。農業の自足をめぐるこの努力は「プランテーションシステムに対する反応として、また強制された生活様式への抵抗として」そのコミュニティが出現してきたカリブ海地方での「再構成された農民」を生じさせたとシドニー・ミンツは示してくれた。そうした抵抗は逃げ出した黒人奴隷が作ったマルーン社会のなかに最も明瞭に見て取れる。

プランテーション企業の労働管理の本質として農業の自足の問題では、このタイプの行動が多義的な成功を勝ち得た。北スマトラの研究では、ジャワ人の農園労働者を中心とした農園の労働関係の歴史にまでたどり、それによって彼らのコミュニティがどのように形成され、変形を受けてきたかを明らかにする研究は少なかった。デリの農園労働者の地域的、民族的対立問題は、農園企業の労働の補充、住居、それに管理政策と関連していることをこれまで十分には認識されてこなかった。

ストーラーはさらに「労働管理の概念的明晰化」の問題を分析している。これは一般的にはヘゲモニーの問題として捉えられる。プランテーション経営においては、単純な資本の論理、経営の論理は成立せず、それはかならず人種、民族（エスニシティ）、ジェンダーといった変数の中で出現する。そうした問題の分析なしには植民地状況の分析は行なえない。²³

強制と説得は直線的な進行の線に沿ってなされたのではなく、種々の経済的な危機や政治的な抑圧という異なった瞬間に併存して現われた。ここでストーラーの関心はジャワに見られるような王朝を中心としたヘゲモニーがデリにはないということである。ヘゲモニーということでストーラーは支配階級の利益を表現するイデオロギーとしてではなく、それを課せられた側の「規範的な現実」や「常識」として受け入れるということを重視している。ヘゲモニーは支配の簡便な注解としてあるいはプランテーション企業が労働者のあらゆる生活に浸透させたのではなく、資本と労働との関係が表現される分野で繰り返しなされることで実現されたと言いたいのである。

北スマトラでは生業としての農業と賃労働は、異なる利害を表わす労働政策の多様なイデオロギーを伴う経済システムの一部なのである。要するにプランテーションに関わる「非資本家的な」特徴が労働の補充とコントロールの分野で見られる。

北スマトラに植民地国家機構は強制を受け入れさせることで国家のヘゲモニーを維持したが、独立後インドネシア国家はナショナリズムの名の下によく訓練され、生産的な労働力のための責任を確保することを労働組合に強制した。国家と企業の利害の一致と不一致は産業

の拡大に関するテーマであり、ある瞬間に彼らが国家のために自分たちの階級的な利益を犠牲にして沈黙を守ることを理解する本質がそこにある。

現在北スマトラでは共有地と私有地が併存し、賃金労働と互酬制的な労働、共同労働とアトム化した労働と生活は、資本への包摂の関係と資本に従属するものとの闘争が複雑なものであったことを示している。オランダ支配下において北スマトラのプランテーションベルトは、目に見える技術的、社会的な実験であった。彼女の研究はそこで生じた人種、階級、民族、それに民族間位階制の問題がいかに操作され、競わされ、変形を被ったかにかかわる。社会的な慣行の純粋な「階級意識」をひきだすことは不可能であり、ストーリーはいかに人種、民族的な対立が階級的な関係のコンテクストの中に出現しているかを明らかにしようとしている。

ストーリーによるスマトラ・プランテーションの社会史の研究は、ナショナリズムと人種主義、エスニシティ、ジェンダーといった階層化、差異化を志向するファクターとの関係性のあり方について、信頼できる資料を着実に積み上げることと、他の地域との比較をなすこと、またコロニアル・ディスコースについての最先端の成果を理論的に示してくれたことにその意義がある。資本と階級は人種、エスニシティ、ジェンダーといった領域で具体的に表現されるという指摘は、マルクス主義、ウォーラステインの成果を個別状況の理解のみならず、錯綜した現実を如何に理論的に捉えたらいいのかということについての最も信頼できる成果をわれわれに提供してくれる。

植民地とは単なる支配者の側の論理で形成されているのではない。植民地のレトリックはヨーロッパ人権力の正当化の反映だけではない。こうした言説は、プランテーション産業にとって、植民者にとって、ジャワ人労働者にとって、公的な秩序にとって、最良のことを正当化するために競争関係にある要求に満ち満ちているのだが、それはヨーロッパ人プランテーション・マネージャーとその部下、彼らと労働者、そしてそのすべてと植民地国家とを戦わせる²⁴。

ストーリーは1995年『資本と対立』第二版の序文で自分自身の問題を次のように整理している²⁵。

(1) 植民地主義と資本主義、政治的関与と学問、人類学と歴史、マルクス主義とフェミニズムとの関係を理解すること。農民の生活と賃労働者の生活を同一の理論で位置づけること。

(2) 北スマトラ・プランテーションベルトへの関心は、①下から積み上げていった歴史を上流階級の資料を下向きに読むことで如何に書けるのか、②労働管理戦略がいかにジェンダ

一化されているか、③なぜ私的で家庭的な領域が政治的な領域となるのか、④ローカルノレッジを世界の動きを犠牲にすることなく理解すること、⑤マルクスとフーコーを参考にしながら、民族誌の新たな定義をすること、⑥「民族誌的現在」とか、「村落研究」といった限界を超えて、より広い空間や時間を扱うこと。

(3) 植民地的、資本主義的、父権制的用語は、物質的関係のイデオロギー的な反映としてではなく、位階制的な関係が信頼され形成される場として問題視すること。その際、ディスコースと支配との関係は、フェミニズム理論、サイドに見られる知識と権力との関連、より一般的にはフーコーのディスコース分析などに注目することでより分析的となる。また管理された性的な配置が、国家・企業のジャワ人やヨーロッパ人双方に対する労働管理にいかに関与しているかの検討。

(4) 従属に関する常識的なカテゴリーが経験そのものを如何に枠づけるのかの分析。つまり、植民地ディスコースが如何にして他者に関する表象や真理であるとの主張を生産するかという問いに変えること。

バリバルは『人種・国民・階級』の第12章「階級の人種主義」において、フランスへの外国人移民の急増が新たな人種主義を生み出しているとして、次のように述べている²⁶。フランス語には「エスニシティ」に相当する言葉がなく、北部マグレブ人、アルジェリア人、チュニジア人、あるいはモロッコ人が一般的に「アラブ人」と呼ばれているが、アラブ人というカテゴリーは明確でなく、それは人間を「優越した人間」と「劣等な人間」とに分割するものとしての人種主義と捉えたほうがいい。そこには、肉体労働の階級的人種主義化とでもいべき軽蔑の視線がこめられている。軽蔑の対象となるのは、「機械の付属品」となり、物理的、抽象的な暴力の下に置かれた機械化された肉体労働であり、それを主に担っている「アラブ人」という新たな人間カテゴリーが具体的にイメージされる。彼らの身体はそのまったき状態を破壊され、有用な器官を物神化され、退化される。

ウォーラーステインはバリバルにちよって、同書第4章「民族性の構築—人種主義、ナショナリズム、エスニシティ」の中で、南アフリカにおける「カラード」と呼ばれる人々の指す対象が立場によって異なることを例証しながら、次のように述べている²⁷。

「人種」「国民」「エスニック集団」という3つの基本的な用語はいずれも資本主義世界経済の構造的特徴に条件付けられている。「人種」は世界経済における垂直的分業、中核—周辺—の対立と関係がある。「国民」はこの史的システムの政治的上部構造、国家間システムを

形成し、それから派生する主権国家と関係する。「エスニック集団」は資本蓄積における非賃労働の広範な要素を維持することを可能にする世帯構造の創出と関係する。3つの用語は階級とは直接関係ない。階級と民族性は対角線上に位置づけられるから。

南アフリカでは日本の実業家を「名誉白人」と遇していたが、現地の中国人はアジア人とされていた。このことから、人種は垂直的分業と結びついた生産過程の地理的集中を表現したものであることが理解できる。資本主義経済が中核と周辺への生産過程がますます地理的に分岐していくに連れて、「人種主義的」カテゴリーは、ある一定の呼び名のもとに明確な形を取り始めた。人類の間に多様な遺伝的な特質が存在することは明白であるが、これを「人種」と呼ぶいくつかの集団に制度化されなければならないということは根拠がない。カテゴリーの数は、あるいはカテゴリー化の事実も、社会的に決定されたものだ。両極化が進むに連れて、カテゴリーの数も漸減していく。

人種と国民を併用する便益とは、人種への類別化は階層的秩序のゆるやかだが規則的な変更過程における国家間競争を表現する様式にある。人種と人種主義は中核地域と周辺地域の相互の抗争において、それらを地域ごとに内部統一する。国民とナショナリズムは階層制的秩序におけるランクを競うより複雑な地域内および地域間競争において、中核地域と周辺地域を内部的に分断する。

これら2つだけでは十分ではないので、かつて少数者集団（マイノリティ）と呼ばれた概念を政治的・経済的利害関係の中でより強調したエスニック集団カテゴリーが作られた²⁵。国家は一つの国民と多数のエスニック集団から作られている。エスニシティと職業は大いに関連する。資本主義の位階層制的現実のエスニック化は一つの解答を与える。つまり理論的な平等と実際の不平等の同時的存在を解決する手段である。

民族性は主権国家の構築と似ている。階級と民族がまったく違うものであることはマルクスもヴェーバーも認めている。階級とは客観的カテゴリー、分析的カテゴリーであり、史的システムにおける矛盾を述べたもので、社会的共同体について述べたものではない。問題は階級的共同体が創出されるのかどうかということだが、これはマルクスのいう即自／対自の区別に相当する。

ここでいえるのは構成された民族、つまり、人種、国民、エスニック集団が不完全ながらも、「客観的階級」と大いに関連することである。近代世界では階級に基礎をおく政治活動の非常に多くが、民族に基礎を置く政治活動の形態を取ってきた²⁶。

階級と民族の矛盾は解決できない。それはシステムの諸矛盾に由来するからだ。民族に基

礎を置く政治活動とは無縁の対自的な階級活動はありえない。民族解放運動とか、社会運動、社会主義国における反官僚運動の中に見出される。つまり、民族性とは何かを問うことがより重要である。それは原始時代から安定した社会的現実ではなくて、敵対勢力を互いに闘争させることになる資本主義世界経済の複雑な歴史的産物である。

こうしたウォーラステインの議論を聞くと、ストーリーがスマトラ・プランテーションベルトで行った分析と、通じ合う議論になってくる。つまり、社会階級的な運動は、民族という用語の中で行われるというわけだ。

同様な観点はベネディクト・アンダーソンも共有している。アンダーソンは『想像の共同体』の冒頭で、1960年代末から70年代末にかけての社会主義諸国間の戦争について疑問点を出している。それは中ソ国境紛争であったり、ベトナムのカンボジア介入、中越戦争であったりする。そもそも、インターナショナルを目指すべき社会主義諸国がその国名に、たとえば「ベトナム社会主義共和国」とか「中華人民共和国」などといった元のナショナルな領土名を何故自国に冠しているか疑問だという。唯一の例外はソ連（ソビエト社会主義共和国連邦）であるようだが、それは21世紀を志向する名称であるよりも、「グレートブリテン」のような19世紀的な帝国主義的色彩が濃い名称であるという。

アンダーソンは改訂版『想像の共同体』の中で「1980年代初頭『想像の共同体』を書いたときソ連が崩壊するなどとはとても信じられなかったが、今それが現実になろうとはその当時は誰も想像だにできなかった」と述べてはいるが、それ以上に問題を深化させてはいない。一つにはこうした問いに答えることが、改訂版という性格上不適當ということもあるのだが、アンダーソン自身にも突きつけられている課題である。

1980年代末ベルリンの壁が撤去されたことから始まった社会主義諸国の崩壊とそれを契機に噴出してきた民族（エスニシティ）問題は、一般的には東西イデオロギーの対立の軸の中で隠されてきた民族（エスニシティ）の問題が、社会主義圏の崩壊に伴って顕在化してきたと説明される。こうした問題は少なくとも1960年代までは階級というディスコースで語られていた問題であった。階級問題が解決すれば、民族の問題は解消していくと一般的には説明されていた。ところが、社会主義圏の崩壊以来顕著になってきた現象は、従来の公式主義の説明が充分でなかったことを見事に例証するが、エスニシティあるいはナショナリズムというディスコースがどこまで優越するかという新たな問題も提起する。

たとえばインドネシアにおける分離独立運動がスハルト退場後さらに勢いを増してきた事

実を考えてみよう。東チモールは1999年8月末の住民投票を経て、併合派による殺戮と破壊はあったが、現在では着実に独立国家建設に向けて歩み出した。また1969年インドネシアに「住民投票」の結果帰属した西パプアが2000年7月の民衆議会で「独立」を決議した。さらにアチェでは相変わらずGAM（自由アチェ運動）の運動が活発で、政府軍側といつ終わることも知れない戦闘を繰り返している。こうした分離独立の動きはどこまで行けば収束するのだろうか。こうした運動に対するインドネシア軍による暴力的な支配、弾圧を正当化できるものではないが、インドネシアという国家は最終的には瓦解するまでこうした運動は終わらないのであろうか。

さらに、同じような事例はインドから引くことができる。戦後インドはイギリス支配から独立したが、そのとき、現在のパキスタンもバングラデッシュも「インド」の一部であった。そもそも「インド」という概念にガンジーらの国民会議派とイスラム勢力側では認識が異なっており、イスラム勢力は、パキスタンからデリーなどの中部インドを通してバングラデッシュにいたるイスラム・インド構想を持っていた。その考えは実現しなかったが、たまねぎの皮をむくようにインドは小さくなってしまった。その動きは現在でも続いており、北部のカシミール、東部のアッサム、ガロなどが分離独立運動を続けている。インド国内でもヒンドゥー教徒とイスラム教徒の争いが暴力的な事件にまで発展することがしばしば見られる。

近代国民国家は20世紀初頭「民族自決」原理を確立し、それは20世紀に通して正当な原理として認められてきたのだが、それはどこまで徹底すべきであろうか。アチェや西パプアの独立は認められるべきだろうか。アチェの独立は東南アジアにおけるイスラム勢力を大いに刺激し、少なくともアセアンの政治的安定をそこなう要因となるであろうことはすぐ予想されるが、そうした観点からのみアチェ問題が論じられていいわけがない。あるいはクルド人問題はいつ解決するのであろうか。こうしたことに少なくとも、エスニシティ、ナショナリズム論は答える義務があるだろう。

4. 植民地における『言葉と物』

ストーリーの『人種と欲望の教育—フーコーの性の歴史と植民地における言葉と物』(1995)³⁰を理解するために、19世紀後半から始まった植民地資本主義の構造変化の過程を充分に知ることが必要である。それは人間のカテゴリーの細分化をもたらしと同時に、「国民」とか「人種」として一般化されるようになってきた人間の新たな差異化も生起させた。

19世紀前半までの植民地支配とは、交易による利益の追求が主な目的で、いわば植民地の点と線の支配であった。ところが世界経済の構造的変化により19世紀後半から、プランテーション経営による植民地の面的な支配が始まった。オランダ領東インド（インドネシア）では、サトウキビ、コーヒー、コショウ、ヤシなどが世界市場で取り引きされる目的のために強制的に栽培された。そこにプランテーション労働者として大量の中国人が導入された。彼らは最初単純労働者として入ったが、次第に現地経済の流通部門を独占するようになり、今日ではインドネシア経済をほぼ牛耳るようになつた。（そのため、インドネシアでは激しい反華人感情が存在し、1998年のスハルト退陣の時、華人街が襲撃された事件の原因はここに始まる）。

オランダ人、フランス人（インドシナの植民地支配）、イギリス人（マレーシア、ビルマ、インドの植民地支配）はお互いに区別されたが、ストローラーによると、ともに「白人である」という意識を育てた。白人という人種的なカテゴリーができるのは、東南アジアを植民地支配していたヨーロッパ人が、植民地経営者としての彼らの共通の利害を守るためにつくりあげたカテゴリーであった（同じ現象はインドやアフリカでも起こった）。これは同時に「白人ではない」人々の存在を前提にしている。こうした意識—これが人種主義であるのだが—が、階級、性と人種の起源に関する多様な言説を生み出し、正当化した。

性もこうした植民地支配の重要な道具になった。最初ヨーロッパ人女性が未婚で植民地に来ることを拒まれたのは、白人女性が原住民男性と結婚すると「白人」の血が汚されるという、人種的な防御意識の反映であった。それでも白人男性と現地人女性との混血が進むにつれて、こうした混血をもたらずフロイト的な欲望は、原住民に関するさまざまな性的なあるいは婚姻上のカテゴリーとなってブルジョワリベリズムの中に混入してきた。19世紀末にスエズ運河が開通してからは、家族連れで東インド（インドネシア）へやってくるオランダ人が増え、白人（オランダ人）、ユーラシアン（混血）、ニアイ（白人男性の原住民愛人）、中国人、インランデル（原住民）といった種々の人間のカテゴリー類型が細分化され、再生産されていった。

「国民」という抽象的な存在は「人種」という「実在的な」存在によって定義づけられた。クレオール、メスティーソ、インドという混血児は白人であるか、つまり名誉あるオランダ「国民」であるかどうかがいつも問題になった。例えば、混血児が犯した犯罪の裁判権の問題、あるいは「白人」以外の「人種」の犯罪歴、性衝動、道徳性などの問題が常に浮上し、「人種」的な言説が拡大再生産された³¹。

ストラーはこうした問題を根本的に考えるために、ミッシェル・フーコーの『性の歴史』と『言葉と物』（英訳のタイトルは「物事の秩序」）で展開された知の一大革命の手法をさらに徹底させた。

ミッシェル・フーコーは、『性の歴史』の中で、性、ジェンダー、セクシュアリティというものがいかに権力作用の結果であるかをヨーロッパの精神史を通して明らかにした。フーコーの言う権力とは、我々が自明なこととして受け入れている日常の秩序そのものの中に潜む権力性のことであり、フーコーは人間の意識下の領域での権力性を鮮やかに描き出した。更にフーコーは、『言葉と物』の中で、近代における「人間」というものがいかに19世紀的な時代の産物であるかを、生物学、経済学、それに言語学という異なった学問分野で前提にされた「人間」というものの言説の共通性を徹底的に分析した。

ストラーは、『人種と欲望の教育』の二つの問題意識を次のように指摘している。

第一は、18世紀から19世紀にかけてヨーロッパで生まれたセクシュアリティに関する言説は、ヨーロッパに限定されず、帝国、植民地宗主国を通して植民地へも浸透していったという事実である。第二は、植民地における人間のカテゴリー化に際して、「人種」概念というものが、大きな役割を果たしたという事実である。つまり、植民地における「人間」とはいかなる言説の下で生産されてきたかという問題である。

人種主義は西欧の辺境に拡大されたのではない。植民地支配を通して、近代人の誕生を告げる啓蒙主義とブルジョワリベリズムは、人種的な思考によって進歩的なプロジェクトを育て、そうしたプロジェクトを享受する階級を生起し、誰がそれから排除されるべきであるかを規程するタクソノミー（分類の基準）を育てた。

だからストラーの問いは、フーコーの著作がいかにヨーロッパの植民地の配置と支配の理解に有効であることを示し、植民地支配の研究がいかにフーコーの『性の歴史』の研究に新境地を開くかを示すことであった。

フーコーもベネディクト・アンダーソンも、人種主義の起源を、国家ではなく、階級に求めている。ブルジョワ的な価値意識、健康、性、身体観が、人種主義的な価値意識を必然的に生み出した。人種主義的な言説は、個人の身体的な陶冶のレベルで作用するのみならず、人類の生物学的な過程という「グローバルな規則」にも妥当する言説として発達した。

植民地では、「ある一定地域を占める人口（ポピュレーション）」と「民族」（ピープル）とが、行政官と民族誌家によって、別々の意図の下に発達した。「人口」とは、数えられ、整理されたものだが、「民族」というのは身体的、文化的、それに心理学的な特性に基づい

て再グループ化されたものである。「人口」は「民族」を代替する概念ではないが、両者ともに、国家建設を現わす概念であって、その中に、ある身体的な特質と隠された心理的な特性が中心的な役割を果たす人種的な文法というものを発達させた。

このように人種というのは近代ブルジョワ・リベリズムの生み出した歴史的な産物であり、フロイトのいう下意識的で投影された欲望という観念はそのエンジン役を果たした。原住民のエロティックな身体という観念はヨーロッパの文学や芸術でいやがうえにも強調された。エドワード・サイードは、それを「オリエンタリズム」という言葉で表現した。

フロイトの抑圧と欲望という観念は、サイードが、オリентとは「ヨーロッパで手に入れない性的な経験を体験できる場所」と正当に記していることから示される。ヨーロッパでは抑圧されているものが植民地では逆に噴出するという結果をもたらした。性的に汚れている、道徳的に汚れている、不妊という考えはヨーロッパ人に対しては一切見られなかったが、それとは逆の考えが中層、あるいは下層を占める混血の子供たちに向けられた。

植民地の重要な性関係は、欲望の主体としてのヨーロッパ人男性とその欲望の客体としての現地人女性の間で起きた。その関係の道徳的退廃が論じられるとともに、その実際的な結合の長所、快楽、そして満足が論じられた。イギリス人、フランス人、オランダ人という名の下に、植民地当局は欲望と理性、原住民の本能と白人の自制、原住民の本能的な欲望と白人の文明、原住民の感性と白人の道徳などを厳しく区別する必要に迫られた。

19世紀のブルジョワ階級の秩序は、人間の可視的、身体的な特徴を、国家的、階級的、それに性的な他者を生み出すために用いられた。そうした傾向は必然的に栄光あるヨーロッパ人とは誰であり、どんな特性を持っているかという問題についての心理的な特性と感受性についての言説を生み出した。ナショナリズムと同じく、人種は「目に見えない結合」であり、道徳性と人格についての話す必要のない前提なのである。常識として喧伝されているために、こうした「真理」は証明されたことはほとんどない。逆に隠されているために、医学、心理学、教育学などの外からの知識で飾り立てられた。

植民地の研究者はヨーロッパの支配を正当化するフィクションとしての合理性、理性、進歩という観念に注目するが、ジェンダーと階級に注目することで、人種と植民地支配に新たな考察を拓くことができる。この点で国民に関する言説は人種に関する言説と非常に似ているのは偶然ではない。アンダーソンが『資本と対立』において期待したように、ストーリーはナショナリズムとジェンダー研究の分野で、一大ブレイクスルーをやったのけた。

5. 多文化主義のアボリアと人種主義

これまでの議論の締めくくりに「多文化主義」を巡るチャールズ・テーラーの議論を要約しておこう。ルソー的な啓蒙主義が人間解放的な主張を行う一方、他方では同質化を強調していくことを先に指摘した。こうした認識を受けてテーラーは、多文化主義の倫理的成立基盤を追及する。テーラーはカナダのケベック問題を例に引きながら、ケベック州内で顕著に見られたように多文化主義が「多文化主義の拒否」をも含みうることを指摘する。ケベックではフランス語の純粋性を守るために、一定規模以上の企業ではフランス語以外の言語の使用が禁じられる可能性が出てきた。これは連邦最高裁判所で拒否された条項であるが、国民国家における人種主義、エスニシティ、ジェンダーの議論と通じあってくる可能性がある。

つまり、「ある優越文化の他の文化への押し付け、この押し付けを助長する優越性の想定に大いに関係する問題である。」ここで問題とされるのは、「われわれがみな多様な文化の価値の平等性を認めるということ、それらの存続を認めるだけでなく、その価値を認めるということである。」

テーラーは、フーコーやデリダ的な「価値に関するすべての判断基準は究極的には権力の構造によって押し付けられ、またこの構造をさらに補強するものである」という主張に疑問を呈している。なぜなら、「彼らがある人々に荷担するとき、彼らはこの種の政治の推進力—承認と尊敬の追求—を見失っている」、と批判する。

そこで重要なのは、「文化の多様性は単なる偶然の出来事ではなく、より偉大な調和をもたらしべく意図されたもの」、と理解する道徳的な態度である。「多様な性格や気質をもつ多数の人間に、長期間にわたって意味を与えてきた諸文化はたとえ、われわれが嫌悪し、拒否すべきものが多く含む場合ですら、われわれの賞賛と尊重に値するものをほとんど確実に含むと想定することが理にかなっている」と、テーラーは「承認をめぐる政治」を締めくくっている。

テーラーの議論に対して、フェミニスト、エコロジスト、それにハーバーマスのような近代批判論者から厳しい批判が寄せられているが、フーコー的な権力観への批判の妥当性を含めて、テーラーの提起した問題はさらに徹底して議論されるべきである。

注

- 1 レヴィ=ストロース『人種と歴史』（荒川幾男訳、みすず書房、1970年）7-10頁。

2 『人種と歴史』38-40頁。

3 同60頁。

4 レヴィ＝ストロースは、「他者への関係の取り方」という観点からルソーを捉えている。レヴィ＝ストロースによればルソーは、野蛮人と蔑まれる対象であった新大陸の人々の生活に入り込み、彼らの資質を真に理解したならば、文明社会の人々が失ってしまった真の平等社会についての知恵と知識を提供してくれるだろうと期待していたという。レヴィ＝ストロース『人類学の創始者ルソー』『未開と文明』山口昌男編、平凡社、56－68頁、1969年。

5 チャールズ・テイラー、「承認をめぐる政治」『マルチカルチュラリズム』（佐々木毅、辻康夫、向山恭一訳）岩波書店、62－70頁、1996年。

6 エティエンヌ・バリバル＋イマヌエル・ウォーラーステイン『人種・国民・階級―揺らぐアイデンティティ』（若森章孝他訳）大村書店、52－66頁、1997年。

なお同翻訳には私が気がついただけでも次のような誤植がある。

p44、前から7行目、あらゆる文化の普遍性を弁護士ながら⇒弁護しながら

p64、後から7行目、何が起こるかも創造することができる⇒想像

p87、後から3行目、ロダンソソ⇒ロダンソン

p103、後から3行目、人間とその超源の想線上の対応関係⇒起源、想像（?）

p181、後から4行目、系属⇒系族

p196、前から6行目、分配システムと前提とする⇒を

p221、前から3行目、分析を謝る⇒誤る

p258、後から3行目、出現はたん企業最上層部の⇒たんに

p285、前から6行目、システムの「外部」として亨えられている⇒与えられている（?）

p309、後から6行目、トムン⇒ソン（?）

p314、前から7行目、木質的に⇒本質

p315、前から3行目、表象の水準でであれ、物理的にであれ、⇒水準に（?）

p368、前から1行目、「純血法」の判定にいたるや⇒制定（?）

これだけ誤植が多いこの書を訳書でしか引用できないのは筆者の不明であるが、今回は時間の関係で原文をチェックできなかった。

7 帝国のこと。アンソニー・ギデンズによる非近代の社会システムを4類型にわけて以下のように説明している。アンソニー・ギデンズ『国民国家と暴力』第3章「伝統的国家―官僚制、階級、イデオロギー」（松尾精文・小幡正敏訳）、而立書房、1999年、98－100頁。

「第一に部族文化という局域的システム。これに狩猟採集民も、定住農耕民も含まれる。このシステムは他の場所で権勢を振るった列強国にその存在を知られることなく、国家の出現を経験しなかった地域に引き続き存在してきた。第二が都市国家システム。都市国家はほとんど港湾都市であり、繁栄の基礎になった海洋交易に依存していた。第三に、封建制国家システム。封建制の概念を中世ヨーロッパを越えてどこまで拡大できるかの議論があるが、それにかなり類似した制度はある。第四は、帝国システム。帝国システムではその周辺を小規模国家なり部族文化の居住する地域が取り巻いていた。これは近現代の国民国家システムとは明らかに異なるとはいえ、短期間ではあるが国民国家システムと共存してきた。帝国システムは互いに共存し、社会変動の過程で時間をかけて空間的にも互いに相手を排除していった。

主要な帝国や「世界文明」では、たとえ支配者がもっと広い舞台が存在していることを認識していても、みずからをすべの地政学的、文化的中心とみなし、孟子の言うように「天に二つの太陽なく、民に二人の天子なし」と考えてきた。帝国は自国の領土内ですべての事柄を普遍化する特性をそなえていた。」

8 Benedict Anderson, *Imagined Communities*, Revised Edition, 1991, p141 et al.

9 Ibid, p141, pp.144-5.

10 Tanah-Air、「土地と水」の合成語で、インドネシア語で「祖国」の意味。

11 Ibid, pp.141-2.

12 フランス人は古来カエルを食用にするとみなされたためこう呼ばれた。

13 Ibid, pp.148-9.

14 ジョン・ダワー、『人種偏見—太平洋戦争に見る日米摩擦の底流』〔原書名：*War Without Mercy: Race and Power in the Pacific War*〕、斎藤元一訳、ティビーエス・ブリタニカ、1987年。

15 これは帝国主義的支配に乗り出した諸国が帝国主義諸国内で勃興したポピュラー・ナショナリズムと対抗する必要上生み出されてきたナショナリズムの一形態である。「ポピュラー・ナショナリズム」と対比されて用いられている概念であるから、「オフィシャル・ナショナリズム」とそのまま用いることにする。「公定ナショナリズム」と訳されることが多いようだが、「オフィシャル」と「ポピュラー」を対比させる意味でも、そのまま使うほうが意味がわかりやすい。

16 Anderson, *ibid*, pp.150.

17 Ibid, pp.153-5.

18 『人種・国民・階級—揺らぐアイデンティティ』、68—110頁。

19 バリパールは注の中で、統合ヨーロッパの将来の行政・教育機構は、フランス語、ドイツ語、

- ポルトガル語と対等な資格で、アラビア語やトルコ語、あるいはアジアやアフリカの言語を認めるだろうか。それともこれらは「外国人の」言語としてみなすのだろうか、と自問している。189頁。
- 20 *Capitalism and Confrontation in the Sumatran Plantation Belt, 1870-1979*, Yale University Press, 1985 (First Edition), 1995 (Revised Edition).
- 21 Frederick Cooper and Ann Laura Stoler (eds.), *Tensions of Empire : Colonial Cultures in A Bourgeois World*, University of California Press, 1997.
- 22 Ibid, pp. xiv-xvii.
- 23 pp.8-13.
- 24 *Capitalism and Confrontation*, pp.xxii-xxiv.
- 25 Ibid, pp.vii-xiv.
- 26 『人種・国民・階級—揺らぐアイデンティティ』362—79頁。
- 27 同、127—156頁。
- 28 エスニシティという概念は1960年代のアメリカで黒人の公民権運動に刺激されて、ワスプではない白人とか、ネイティブ・アメリカン、あるいはアジア系の人々の自己主張をさす概念として生まれた。ところがエスニシティの本質は、国民国家における主流とマイノリティという形でほとんどの国家に共通に見られる現象であることがすぐに理解され、エスニシティ研究という新たな研究分野が開拓された。
- 29 たとえばベトナムのフランス帝国主義、アメリカ帝国主義への戦いは、帝国主義への抵抗運動としてよりは、民族解放運動としての側面が非常に大きかった、とアンダーソンは述べている。それをワシントンの政策決定者は理解できなくて、ベトナム戦争という泥沼にはまり込んだという。ベネディクト・アンダーソン『言葉と権力—インドネシアの政治文化探求』（明石書店、中島成久訳）1997年、13—4頁。
- 30 Ann Laura Stoler, *Race and the Education of Desire : Foucault's History of Sexuality and the Colonial Order of Things*, Duke University Press, 1995. この本は翻訳計画があるそうだが、引用はすべて、1995年版からのものである。
- 31 これについては、Ann Laura Stoler, *Native Servants and the Cultivation of European Children in the Netherlands Indies*, in *Fantasizing the Feminine in Indonesia*, edited by Laurie J. Sears, Duke University Press, Durham and London, 1996, pp. 71-91, も参照。
- 32 『マルチカルチュラルイズム』85—101ページ。